



「アジア学生技術会議」誕生秘話

昭和 32 年 (1957) 卒 林義雄 (90) の回想

日中国交正常化前に清華大学生の招聘に成功!! 来日した中国学生が見た日本の印象は？

1956 年〔昭和 31〕当時、日本はまだ中国（中華人民共和国）と国交を結んでいなかった。このような時に、学生主催のイベントに国交のない中国から学生をよぶという“とんでもない計画”を立て、翌年（1957）に実現した学生たちが本学にいた。日中国交正常化（1972）の 15 年も前の話である。きっかけは、学生サークル ESS（English-speaking society）のリーダー役だった林義雄（電気工学科 4 年生）が大学推薦で世界学生奉仕団（WUS, World University Service）の国際セミナーに参加したことだった。この WUS の活動に触発された林さんは、学生時代の締めくりにふさわしいことをやってみたいと思うようになり、WUS とは少し趣の異なる「アジア学生技術会議」を組織することにした。技術協力によるアジア諸国の繁栄につなげるのが究極の目的だったが、まずは日本各地の工場見学旅行と討論会を通して、アジアからの留学生に我が国の技術の現状を紹介すると共に、各国学生間の理解と親睦を深めることにした。それにしても中国の学生がいないのでは話にならないし、もし招聘に成功すれば、世間も驚く一大事だ。血が騒いだに違いない。当時のメンバーには、卒業後の社会人時代はもちろん、定年後もユニークな活動をしている人が多い。その中から現在も活発に社会貢献を続けている 3 名の方（林義雄 90 歳・江口宏明 83 歳・鈴木富司 84 歳）に集まってもらい当時を振り返ってもらった。本稿では、筋立ての都合で、林さんの回想という形で紹介する。

背景 & この起こり

米軍将校宅のハウスポーイとして 生の英語を習得

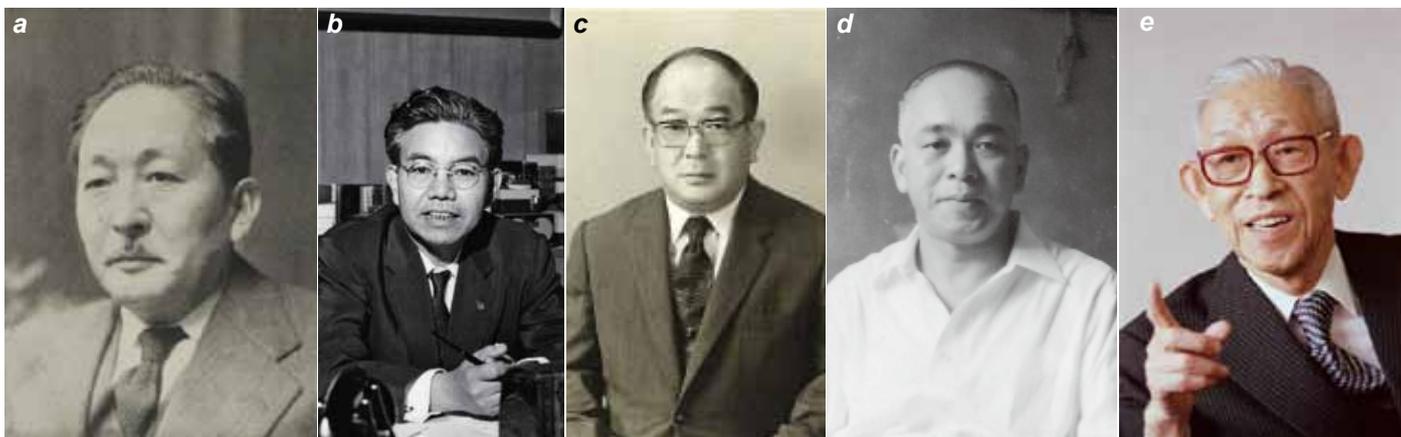
林義雄は 1929 年〔昭和 4、本学が大学に昇格した年〕に東京の品川で生まれた。中学時代には勤労働員に駆り出され、終戦後に高校生活を送り、1949 年〔昭和 24〕に本学の電気工学科 B に入学した。学生時代は、ESS（English-speaking society）部を立ち上げたり、語学留学と同じ効果を狙って、半年間休学して横浜山手（横浜開港後の外国人人居留地で、山手一帯は空襲による被害が少なく、戦前からの高級洋風住宅の大半が残っていた）の米軍将校住宅にハウスポーイとして住み込んだりもした。ハウスポーイやハウスメイドの給料は比較的良かったので、アルバイトとしては人気があったが、学生の場合長続きしないケースが多く、雇用主

側（特別調達庁）は「学生は雇わない」と決めていた。林さんは学生であることを隠して将校宅に住み込み、英語の習得と米国人家庭の生活環境の勉強を兼ねて、彼らの家事を手伝うことにした。ところが将校宅の奥さんにすっかり気に入られ、「あなたほど優秀ならば、アメリカの大学に行きなさい。費用はうちで持つてあげるから…」としきりに留学を勧められたが、いまさら「実は東工大生で…」とも言えず、困ったそうだ。

当時本学で英語の授業を担当していたのは竹沢啓一郎助教授（1912～1975）や伊藤整専任講師（1905～1969）らだった。竹沢さん（図 ① a）は戦後初の口頭表現中心の中学校の英語教科書『Jack and Betty』の著者の一人として名が知られていたし、『Jack and Betty』は 1947 年〔昭和 22〕から 1958 年〔昭和 33〕にかけて全国の 8 割以上の中学校で使われていたので、そのような先生に習えるのは東工大生の誇りでもあった。



① 人物写真（a 竹沢啓一郎 本学助教授、b 伊藤整 講師、c 崎川範行 助教授〔顧問・引率〕、d 中島照一 学生係長；肩書は当時のもの）。



② 人物写真 (a 宇都宮 徳間 自由党代議士, b 赤尾好夫 旺文社社長 [旺文社提供], c 向 正夫 助教授 [引率], d 清浦雷作 教授 [第2回の顧問・引率], e 松下幸之助 パナソニック創業者 ; 肩書は当時のもの)

伊藤さん(図①b)は、『チャタレー夫人の恋人』(Lady Chatterley's Lover)の翻訳者として時の人だった。1950年〔昭和25〕に出版された無修正版は、性描写が問題となり発禁処分とされたため最高裁まで争ったが敗訴(1957, 昭和32年)。伊藤さんは講義では、Charles Dickens (1812-1870)の『クリスマス キャロル』などを教材にして、親身になって「英語」を教えてくれたので授業を楽しみにしている学生が多かったそうだ(伊藤整に関しては本シリーズ「とっておきメモ帳No.6」の5頁参照)。

“国境を越えた善意の連帯” 物語 に感動

林さんは、実話に基づいて1955年〔昭和30〕に制作されたジャック・レミイ監督のフランス映画『空と海の間』を見て鳥肌が立つほど感動した(図③)。あらすじはこうだ：

ノルウェー沖の北海で操業中だった漁船で異変が起きた。乗組員12名の内11名がひどい吐き気と嘔吐に襲われたのだ。残り一人(Mohammed, ただ一人のアラビア人船員)には、不思議なことに何の異常も現れなかった。急遽引き返すにしても、最短の港まで3日はかかる。救助を求めようとするが、悪いことは重なるもので、通信機までが故障して役に立たない。体調を壊さなかった Mohammed がアラブ人だったことから、「異国人なんか乗せるから、呪われたのだ」と

船内の雰囲気までが険悪になっていった。

ノルウェイ人船長(ル・グレルック Le Guellec)はアマチュア無線技士(ハム)でもあったので、余力を振り絞って、故障した通信機とは別の個人用の無線機を使って全世界のハム仲間に向けて窮状を訴えるためCQ(無線用語; 聞こえたら応答願います)を発信した。この電波をアフリカ・ベルギー領コンゴに駐在していたフランス人のアマチュア無線家がたまたま受信、近くにいた軍医を呼んできて船長の訴えを聞いてもらった。軍医の診断は食中毒だった。症状から、乗組員が食べたハムがボツリヌス菌に汚染されていた可能性が極めて高く、イスラム教徒の Mohammed は宗教上の理由から豚肉を含むハムを食べなかったので難を逃れたのだ。ボツリヌス菌による食中毒は極めて致死率が高く、吐き気・嘔吐・便秘・筋力低下・視力

障害・呼吸困難へと症状が進行する。12時間以内にボツリヌス毒素(神経毒)に対する抗血清を注射しないと、最悪の場合、船長を含む11名が呼吸麻痺により死亡することになる。

問題の抗血清はパリのパスツール研究所でしか手に入らない。北海上の漁船とアフリカコンゴとの交信を傍受したパリのアマチュア無線家は何とか抗血清を入手するが夜間で輸送手段がない。これを知ったミュンヘンのアマチュア無線家が、北海の受難船までの空輸方法を模索する。最終的には、ベルリンのアメリカ空軍、ポーランド人スチュワーデス、ロシア空軍、デンマークの航空機などがリレーして北氷洋上の船まで届けられるが、飛行機から正確に目標地点に落下させるのは難しく、抗血清入りのバイアルは船の甲板ではなく、海に落ちてしまう。それを拾うために Mohammed は凍てつくような海



③ 映画「空と海の間」の画像。フランス語の原題: Si tous les gars du monde, 若し世界の子たちが手を結べば…(花の輪舞ができるだろう)〔1955〕(ポール・フォールの詩『フランスのパラード』〔1897〕から)。



④ ASCOTの生みの親となったWUSの第6回国際セミナー（a: カナダ代表団が羽田に到着 1955.7.1, b: 高野山での精進料理, c: 足立区梅島小学校でのワークキャンプ）。

に果敢に飛び込む。

林さんもアマチュア無線家としての活動を開始

当時本学学生だった林さんは、1954年〔昭和29〕3月に既にアマチュア無線技士免許を取得していたが、正式な呼出符号は未だ申請中だった。しかし、この映画に感動して、早速、交付されたばかりの呼出符号JA1UTの無線局を自宅に開局、アマチュア無線の世界にも足を踏み入れた。アマチュア無線との関りは、後述するように、林さんの定年後の人生をさらに意義深いものにしてくれることになる。

世界学生奉仕団（WUS）の活動に参加

林さんは、学業以外にも様々なことに積極的に取り組んだので、通常の学生が4年間で修了する本学を8年かけて卒業した（1949年〔昭和24〕入学→1957年〔昭和32〕卒業）。活動的で英語ができる学生として目立っていたので、在学7年目（1955, 昭和30）の夏休みに大学から推薦されて「世界学生奉仕団」^{〔注1〕}（WUS, World University Service）のセミナーに約2ヶ月間参加した。といっても推薦されれば自動的に参加できるわけではなく、WUSによる選抜試験（筆記と面接）をパスした上での参加だった。

選抜試験の後日談によれば、林さんは時事問題ではトップだったが、英

語では最低の成績だったらしい。彼はESSや米軍将校宅でのハウスポーイの仕事を通してかなりの英語力を身に付けていたはずだから意外な結果だが、参加者の多くは英文科の学生だったと聞けばやむを得なかった面もある。それにしても、当時の大学生の語学力のレベルがいかに高かったかを物語るエピソードだ。

WUSの1955年度〔昭和30〕の第6回国際セミナーは日本とカナダのWUSの共催で7月2日から約2ヶ月間にわたって日本で開かれた（図④）。セミナーの主題は「現代において大学はいかなる役割を果たすべきか」^{〔注2〕}で、参加者は日本・カナダ・米国をはじめ、香港・パキスタン・マレーシア・インドネシア・フィリピン・セイロン（現スリランカ）などの学生78名だった。日本側は、東工大・東大・慶應大・日大・国際キリスト教大・青山学院大・学習院大・津田塾大・東京女子大・日本女子大・成城大・京大・同志社大・関西大・関西学院大・神戸女学院大・広島大・広島女学院大・鳥取大・久留米大などの学生だった。指導教官は、カナダBritish Columbia大学のソワード教授、東大の末岡清市助教授、日大の深津栄一先生、その他マレーシア大学のサンドウ・シャム教授も協力した。

7月5日に高野山普賢院（図④b）で開かれたオリエンテーション・禅修行をかわきりに、法隆寺・春日大社

などに参拝し、日本各地の工場・広島原爆資料館・三井/三池炭鉱などの見学、ワークキャンプ（足立区の小学校での子供たちとの交歓やツルハシを用いた運動場整備、図④c）、さらに8月2日～20日まで国際基督教大学（東京都三鷹市）^{キリスト}でセミナーを行い、最後の1週間は自由行動の形で日本の学生宅でホームステイし、近所の銭湯も経験して貰ったようだ。

アジア学生技術会議を企画

最大の目玉は国交のない中国から学生を招くこと

さてWUSセミナーに参加して、国際理解と協調の必要性及び奉仕の精神に心動かされた林さんは、ESSの仲間と海外研究会及び学友会の役員を誘って「アジア学生技術会議」^{〔注3〕}（ASCOT, Asian Students' Conference on Technology）を組織した。WUSの技術版を卒業前に実施するとともに、その目玉として、当時国交のなかった中華人民共和国からも学生を招待するという一見“無謀な”計画を立てたのだ。しかも、何かと林さんのことを気にかけてくれて、WUS国際セミナーへの参加を強く進めてくれた教務課の中島照一 学生掛長（図①d）ですら、「林君、悪いけど大学には8年以上はられないのだよ。今年こそ卒業してくれないと…」と心配してくれたように、卒業研究もきちんと仕上げなければならなかった（指導教官は西巻正郎教授；テ-

マは今日の電子レンジのもとともなった大電カマグネトロン)。就職に関しては黄金時代で引く手あまただったが、それでも希望する会社の工場で1週間くらい実習をし、成果報告会で発表する慣例になっていたから、常識的には他の活動をする余裕はないはずだった。

アジア学生技術会議 ASCOT のメンバーとなった江口宏明も電気工学科の4年生だったので、事情は同じだった。

綱渡りの始まり

就職活動が終わった10月末から ASCOT のメンバーたちは本格的な活動を開始した。中国から学生を招聘する件については、日中友好協会に相談し力になってもらった。香港出身の留学生(郭鈞燃)に助けをもらいながら中国語の招待状を準備するとともに、法務省入国管理局に打診した。好意的だった日中友好協会とは対照的に、入国管理局はけんもほろろだった。「国交が回復していない中国の学生にビザなど出せるわけがないだろう」というわけだ。

時間的余裕もないし、資金の目途も立っていなかったので一時は諦めムードになったが、発案者である林さんにとっては簡単に諦めるわけにはいかなかった。たまたま近くの品川高等女学校(現品川女子学院、漆雅子氏が1925年に設立)の漆校長から、「そういう話なら、宇都宮先生に相談してみたら」と勧められた。宇都宮徳間氏(図②a, 1906~2000)は林さんの地元(品川区)選出の自由党衆議院議員で、党内ではリベラル派だった。林さんは早速、単身で五反田、池田山の宇都宮代議士宅を訪ねた。代議士はたまたま風邪をひいて臥せっておられたが、床の上に半身起き上がって、林さんの話を聞いてくれた。「そうか」という返事以上のことは約束してくれなかったが、後日、入国管理局から林さん宛てに中国人学生の入国を認める旨の連絡がきた。それ以来、林さんは宇都宮さんを「立派な人だ!」と尊敬している。宇都宮

さんは、後に日中友好協会の第3代会長(1980~1992)を務めた〔参考:本学のすずかけ台キャンパスに近い中央林間駅北口から約1kmのところ宇都宮記念公園がある〕。

「立派な人」といえば、こんな逸話も残っている。「ダメな人」と一緒に紹介しておこう。ASCOT のメンバーが資金集めのために或る有名新聞社を訪れたときに対応してくれた記者は、「すばらしい企画だし、これぐらいの資金(30万円)ならそんなに難しくないよ。個人的に知人たちを介して集めてあげるよ」と約束してくれた。しかし、待てど暮らせど、連絡がない。タイムリミットが過ぎたところで自分たちの考えが甘かったことに気づき、緊急事態に対処しなければならなくなった。

見学旅行を含む企画自体を縮小する案も検討されたが、それではこれまでの努力が水の泡だ。そこで皆で手分けして、協会や会社を回り寄付を募り始めた。しかし、思うように資金は集まらない。追い詰められた林さんは、大学受験時代に愛読した『蛭雪時代』を思い出し、出版元である旺文社の赤尾好夫社長(図②b)を訪ねた。「分かった。うちは30万円出そう。そこで君たちは当社に何をしてくれる?」、「参加留学生に英文の報告書を御誌に投稿させます」、「よし、あとは会計課長と話してくれ」。交渉は5分もかからなかった。即断即決の赤尾社長も立派だったが、とっさに“受験雑誌では外国の学生の英文投稿は目玉企画になるだろうから、参加留学生に英文レポートを書いてもらい、蛭雪時代に寄稿することにすれば Win-Win の関係で寄付してもらえるのではないか”と閃いたのはさすがだ。

悲劇! 電報が届かない

中国学生を招待するための招請状を11月1日に中華全国学生連合会宛に送ったが12月に入っても返事がない。12月3日に再度招請状を送り直したが、年が明けも返事が来なかった。中国学生の参加は無理と判断し

て、断り状を書き終えた1月14日に中国から1通の航空便が舞い込んだ。次のように記されているではないか:「前後2回のお手紙に感謝いたします。1回目の手紙の後、3名の派遣を電報でご通知申し上げました。その後の様子をお知らせください。この会議に出席できる光栄を喜ぶと共に皆様との友好交歓の機会を楽しみにしています」。

中国からの重要な電報が届かなかったために、事態は手遅れになりつつあったのだ。時間的なことを考えると“断念”せざるを得ない状況だったが、「日中文化交流協会」^(注4)の励ましもあって初志貫徹路線に踏みとどまった。中国側も、さすがに時間的に難しいと考えたのだろう、その後、2月15日に「3月は多忙のため不参加」との電報が送られてきた。万事休すだ。大学や日中文化交流協会の執行部に報告して戦線縮小を図らなければならない。その前に、ダメもとで、林さんたちは日中文化交流協会の事務担当村岡久平氏(1934~2019;後の事務局長)とタグを組んで中国宛に次のような主旨の電報^(注5)を打つことにした:「歓迎準備は整っています。参加いただけないと大学や日中文化交流協会が窮地に追い込まれ、取り返しのつかないこととなります。何卒ご再考くださいますように」。

起死回生

メンツや組織を大事にする中国の伝統のせい、あるいは高度な政治的判断があったのか、理由は不明だが電報の効果ははてきめんで、2名を派遣してくれることになった。奇跡の大逆転だ。歓迎^{のほり}の幟を用意し、ASCOT のメンバーはバスをチャーターして羽田空港まで出迎えに行った(1957年(昭和32)3月13日);第1回 ASCOT プログラムが始まる前日のことだった。トラップを降りてきたのは、潘霄鵬^{パンシウホン}(24歳)と賈棟鏢^{チャアライイ}(25歳)で、潘さんは清華大学機械工学科の学生で学生自治会会長経験者、賈さん(中国共産主義青年団員)は北京大学の日本語科卒で通訳を兼ねていた(図③)。



⑤ 羽田に到着し花束を贈呈された中国の学生（右から潘霄鵬、賈棟鏘；1957.3.13）。

⑥ 結団式・オリエンテーション（東工大、本館4階、第1会議室）。教授会に使われていた室で、半円形に配置された机と椅子のセットは歴史的に価値あるものだったが、利便性には抗しきれず最近廃棄された。数脚の椅子のみが地球生命研究所（石川台地区）のロビーで活用されている。

現在、本学は清華大学とは密接な協力関係^(注6)を築いてきているが、その源流の1滴は清華大学の潘さんが参加したASCOTの企画にあったと言えるかもしれない。通訳を務めた賈さん（1931年生まれ）は、その後、大の親日家となり日中の友好に貢献した。中国共産主義青年団国際部長、中国国際信託投資公司CITIC駐日総代表、中国青年国際人材交流センター副理

事長などを務め、2008年には中国青年代表団の最年長代表（76歳）として来日している。2010年の雑誌対談ではASCOTによる初来日に触れ、次のように述べている：「私が最初に日本を訪問したのは、戦後の昭和32年の春です。日本は敗戦を経て、人々の生活は楽とはいえませんが、皆一生懸命に働いて、これからより生活を豊かにしようとあらゆる分野で活

気があり、人々は生き生きとしていました。」^(注7)

西日本見学旅行の日程と概要

参加留学生の人選に関しては在日学生会を通じ、適当な人を推薦してもらうことにした。当時の留学生は母国ではトップレベルの人たちばかりだったので、特定の国に偏らないようにすれば十分だった。参加費3,000

| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
|--|--|--|--------------------------------------|---------------------------------|--|-----------------------------|
| 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 1 | 2 |
| 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 |
| 10 | 11 | 12 | 13 (羽田空港) 中国学生2名の 出迎え | 14 (東工大) 結成式 オリエンテーション | 15 (岡崎) トヨタ自動車 日本電装 | 16 (名古屋) 日本硝子 市内観光 |
| 17 (大阪) OTV見学 市内観光 関西国際学友会 | 18 松下電子工業 (神戸) 新三菱重工神戸 造船所 | 19 (倉敷) 倉敷レーヨン 大原美術館 大原民芸館 | 20 (向洋、広島) 東洋工業 県庁 原爆資料館 | 21 広島WUS主催の 討論会 宮島見学 | 22 (八幡) 八幡製鉄所 (小倉;別府) 市内見物 | 23 (津久見) 小野田セメント |
| 24 (京都) 市内観光 朝日新聞主催座談会 | 25 市内観光 すき焼パーティ 閉会 | 26 (奈良・岐阜・刈谷) グループに分か れ自由行動 | 27 | 28 自由行動 | 29 | 30 |
| 31 (神田, 学士会館) 報告会 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |

⑦ 1957年3月のカレンダーと第1回ASCOTの日程



⑧ 車で移動中の参加者。



⑨ 原爆死没者慰霊碑（広島）。

円を前もって徴収することも問題なく、最終的に13名の留学生（カンボジア1〔東大〕、中国2〔清華大、北京大〕、香港1〔東工大〕、インド1〔東工大〕、インドネシア1〔本州製紙〕、韓国1〔東工大〕、パキスタン2〔東大、農工大〕、フィリピン1〔東工大〕、タイ3〔東大、東洋英和、日赤短大〕）と16名の日本人学生（東工大12、東大2、広島大2〔現地参加〕）に、付き添い教官2名（前半は崎川範行助教授①c）、後半は向正夫助教授②c）が決まった。一行は、1957年〔昭和32〕3月14日に、本学で結団式及びオリエンテーション（図⑥）を行った後、岡崎のトヨタ自動車工場の見学を皮切りに18日間の工場見学と討論会（主として夕食後）に臨んだ【詳細は図⑦参照】。

移動には主に汽車（図⑧）や貸切バスを利用したが、訪問先の企業側

が駅までの送迎・食事・宿泊などの面倒を見てくれることが多かった。ときには送迎用に数台のタクシーを手配してくれた上に、タクシーによる市内観光をプレゼントしてくれた会社もあったというから驚くべき厚遇だ。当時は大学生や留学生は、将来を担う人材として社会から大事にされていたこともあるが、実施の1カ月前にはメンバーが手分けして現地を回り、礼を尽くしてお願いした上に、「先乗り」役が直前に訪問先をおとずれて調整した“誠意”を汲んでもらえたのだろう。

広島WUS連合会主催の討論会や原爆記念館の見学は参加者、特に留学生の心に深く刻まれたようだ（図⑨）。国交断絶で情報が乏しかった中国の鉄鋼産業の状況を中国の学生に聞け

るという期待もあってか、八幡製鉄では重役までが出迎えるという破格の歓迎だったようだ。3月25日に京都観光ホテルで閉会式を兼ねた“すき焼き”パーティを行い、26日～30日までの自由行動の後に、3月31日に再び東京に集まり、神田の学士会館で報告会を行い（図⑩）、すべての日程を終えた。本学の4年生は、3月26日が卒業式だったので、京都での閉会式後に夜行で東京に向かい何とか式に間に合ったようだ。学士会館での報告会の準備は、東京大学の「アジア学生友好会」が一手に引受けてくれた。中国の学生（潘さんと賈さん）は、ASCOTの行事以降も日中文化交流協会の計らいにより4月中旬まで日本に滞在した（合計33日間）。



⑩ 東京神田の学士会館での報告会（1957.3.31）

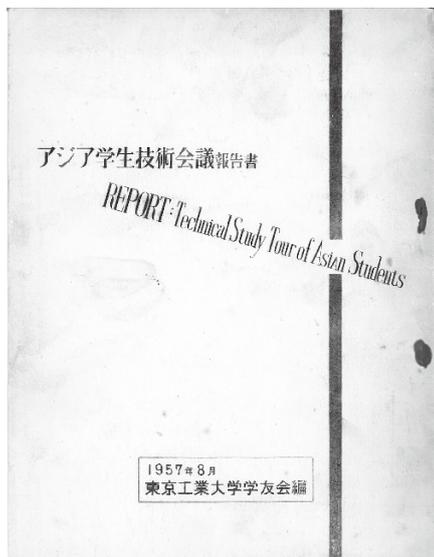


⑪ 全学祭（現工大祭）での発表（1958.5）。第2回ASCOTの様子を説明する鈴木さん（第2回の実行委員長；顧問は崎川範行教授①cと清浦雷作教授②d）。

報告書の作成

今回の企画では ASCOT のメンバー全員が超過密スケジュールをこなした。何度も壁にぶつかりながらも何とか乗り越え、大きな達成感と充実感を味わうことが出来た。この勢いで報告書も完成させたいところだが、4年生は翌日から会社勤めが始まる。こうなると残りのメンバーで報告書を作り、かつ次回の計画を立てることになるが、その責任者として選ばれたのが2年生になりたての鈴木富司だった。夏休みの大半を費やして編集し、ガリ版刷りは鈴木さんの友人に助けてもらったそうだ。出来上がった報告書（B5判57頁、図⑩）には執筆者と編集者の熱い思いが溢れている。報告書（第1回から第5回分まで）はアルバムや新聞記事と共に、本学の**資料館**（本館3階337号室）に保存されているので、是非ご覧いただきたい。

引率教員が「…学生諸君の異常ともいえる熱意と努力…」、さらに「…満腔の敬意と賛辞を送りたい…」と讃えているのが印象的だ（注8）。ASCOTの成果は「大学祭」でも発表され、好評を博した（図⑪）。



⑩ 第1回アジア学生技術会議の報告書。報告書は表紙、本文ともにガリ版刷り。

中国からの学生の目に日本はどのように映ったのだろうか。報告書の中から該当箇所を引用しておこう、

羽田空港で彼らが痺れたエピソードと共に：

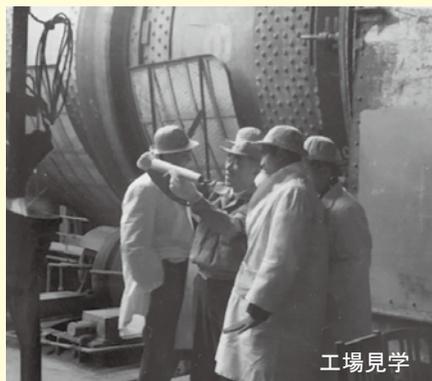
「初めて日本を訪問す」

バンショウボン チャアリイイー
潘霄鵬・賈棟鏢

我々は東京工業大学学友会の招請に応じて、日本で行われたアジア学生技術会議に参加した。会議終了後、なお日中文化交流協会の招きをうけ、会議日程を含めて33日間日本に滞在した。会議に参加した其の他の代表は、皆日本にいるアジア各国の留学生であり、我々は外国から参加した唯一の代表であった。アジア学生技術会議実行委員会委員長は、「新中国の学生が参加して、始めてアジア会議と云う事が出来る」と述べた。彼の率直な言葉と、固い握手によって我々は、日本の学生諸君が中国の学生に対して、どんなに深い友情を抱いているかを知ることが出来た。

第一流の工場

この度の会議は実際には、日本の工業技術を見学する旅行であった。我々は18の都市を訪問し、20余りの工場を見学した。80秒毎に1台の自動車を生産するトヨタ自動車工場、5万トンの汽船を製造出来る新三菱造船所、「極東第一の”八幡製鉄所、及び電子管工場、セメント工場、化学繊維工場が含まれている。…（略）…我々は、これらの状況を見て、思わず心から、9千万の勤勉なる日本人民に深く敬服した。しかし我々はちがった別の事をも耳にした。…（略）…、多くの会社では外国と技術提携を結んでおり、原料、生産、販売の各方面で束縛をされている。我々は、これについて日本の友人の為に心配するのである。この事実を見て、われわれは、会議の席上で、某教授が強



工場見学

調した「アジア各国の技術の交流を行う方式は“援助”ではなく“協力”であるべきだ」と云うことの真の意味を理解するのである。

充実した設備と好学の精神

我々は、京都と東京で多くの有名な大学を参観した。学校の実験設備と学術討論の盛んさは、我々に深い印象を残した。…（略）…日本の大学の研究能力も比較的豊富である。例えば東京工業大学では、学生は、1400名であるのに対し、教授、助教授は170名である。春の行楽の季節というのに、大学の実験室は満員であり、いかに日本の科学技術者が研究心に燃えているかがわかる。…（略）…

科学と技術をもって人類に幸福を

我々は各地を見学中に、公園の入口に立ち、手に「平和が続くことを希望する」と云う白い布をもち、金をもらっている傷痍軍人や、多くの家の門にかかっている「遺族の家」という表札や、慶応大学のこわれた講堂や、東工大の未だに洗いおとされていない防空用黒壁、



迷彩色の本館

広島あの凄惨な原子爆弾の資料室を見た。これらはすべて、あたかも人々に戦争がいかに恐ろしいものであるかという事を目覚めさせようとしているものようである。

広島に行く途中で、我々は一人の煙草や扇子を売っている商人と雑談をした。彼は兵隊になってアジアの沢山の国へ行った事を語り、なお各国の風俗人情なども語った。最後に彼は後悔しているかの様に云った「あの時は大臣にだまされたのですよ」と。そうだ、戦争が人民を教育したのだ。人民はすでに自分の力で平和を守り、戦争に反対することを知っている。この商人の話は、何故3千余りの日本人民が原子

原爆死没者慰霊碑



兵器反対の署名をしたのか、何故青年は、毎月衣食住を供与する外に、3,200円も支給され、卒業後は12,420円の月給をもらえる防衛大学校へ入りたがらず、半労半学の生活を願うのだろうか、何故彼らは再軍備反対の旗印を高く掲げるのか、を説明している。たしかに日本人民は鋼鉄を建設に使用することを希望するのみでなく、科学技術をもって人類の生活により大きい幸福をもたらす様に要求しているのである。

両国の学生の往来には障害がない

日本にいた時は、あたかも友情の大海の中で生活している様であった。鈴木富司君という学生は、中国の学生が日本に来るということを聞いて、兄からいくつかの中国語を習い覚え、我々に会った時すぐに、「謝謝 (xiè xie, ありがとう)」「請坐 (qǐng zuò, どうぞお座り下さい)」「不要客气 (bú yào kèqì, ご遠慮なく)」と云うのであった。ある時には、日本の学生は我々を彼等の家に招き、自ら料理を作ったり、それを運んだりしてもてなしてくれた。ある学生は広島からやってきて記念品をくれた。江口宏明君という人は卒業して会社に就めたが、我々が帰国するとき飛行場に電報を打ってきた。しかし飛行機が夜半に発つことに変更されたので、我々は飛行場で彼と固く握手することが出来た。我々はここでこの様な感動的なことを一つ一つあげることは出来ないが、友人達の顔は現在我々の目の前に一つ一つ浮かんでくる。(中国の新聞『中国青年報』より両君の報告書を翻訳)

生涯現役

ASCOTの経験はメンバーに自信を与え、その後の成長の原動力となった。ASCOTの立ち上げに深く関わった林

義雄・江口宏明・鈴木富司らは、今も交流を続けている(図⑬)。社会人時代のみならず、定年後も生き生きと新しい仕事(社会貢献)に取り組む彼等の姿にASCOT精神の具現化を見ることが出来る。インタビューには、林・江口・鈴木の3名の方に集ってもらったが、令和元年の連休中(5月3日)にしか、日にちを設定できなかった。皆さん80代半ばに差し掛かって、羨ましいほど元気かつ多忙なのだ。最後に、学生のキャリアデザインの参考になることを願って、3人のその後の人生を簡単にたどってみよう。

林義雄：セールスエンジニア(SE)の草分け、松下幸之助、そしてハム

社主にひかれて松下電器へ

林さんは、松下幸之助(図②e)が好きだったので、彼の考え方を学びたいという一心で松下電器産業(現パナソニック)に入社を希望した。しかし2名の採用枠はすでに埋まっていた、学内では、他に回れと言わんばかりに取り合ってもらえなかった。「技術職ではなく技術営業職(SE, sales engineer)という新しい職種で応募するのだから技術職2名とは別枠だ」と主張して、大学側を渋々納得させたのだが、今度は松下電器から音沙汰がない。しびれを切らして

某有力商社にも応募することにした。就職の世話を担当していた本学の事務官が、このことを松下電器に伝えたところ、即「うちで採用します」となったそうだ。林さんは松下電器に30年近く(1957から1986年まで)勤めたが、この間に松下幸之助社主と話すことが出来たのは2回だけ：1回目は採用時の社長面接、2回目はある朝、東京支店の閉まりかけのエレベータに飛び乗ったとき。わずか1階から3階までの間だったが、「林君最近はどうやね」と幸之助社長から声をかけられた。『自分ごとき一兵卒の名前を覚えていてくれた!…』; 林さんの中で、松下幸之助が“憧れ以上”の存在になった瞬間だった。

海外でのオーディオ事業

林さんは1964年に松下通信工業(株)自動車機器事業部海外課長になってからは世界中を飛び回った。東南アジア・中近東・南米・欧州・中国で車の音響部品を作る工場の建設企画に携わるとともに、現地の人たちと協力して工場経営を行った。今でも印象に残っているのは、(1) 或る韓国企業と協力会社を立ち上げる時に、先方の社長のズボンのポケットにPHP刊松下幸之助の『道をひらく』が入っているのを見て、この人とならうまくやれると確信、話を進めたところ期待どおりの結果になったこ



代々木クラブ

⑬「第1回ASCOT」メンバーの同窓会(2012.12.5)。左から：鈴木、林、江口。

と、(2)「インドネシア松下」でカーステレオを生産し、取引のあった三菱商事の駐在所（インドネシアでの三菱自動車の生産・販売を統括していた）に挨拶に行ったところ、どこかで見たような人がいて、それが何とASCOTと一緒にやった鈴木さんだったこと、(3) WUSの国際セミナーで知り合ったパキスタンのアニタ・グラマ・アリ（Anita Ghulam Ali, 参加時カラチ大学の院生）が同国の政界で活躍していると聞いて、トランジットで立ち寄ったカラチ空港から懐かしさのあまり電話したと



国際キリスト教大学でのセミナーに参加中のアニタ・グラマ・アリ

ころ、彼女は空港まで来てくれ、小1時間会うことが出来たこと。「私は野党の党首で現政府とは対立の間柄よ」と照れくさそうに話してくれた時の笑顔は今も鮮明に覚えているようだ。彼女は今も元気になっているだろうか。

定年後はハムとして国際貢献
林さんは、1986年に松下電器を定年退職した後は、アマチュア無線家（ハム）として活躍した。1988年に(株)日本アマチュア無線連盟（JARL, Japan Amateur Radio League）の理事に就任し、80歳になるまでの20年間、我が国と近隣諸国のアマチュア無線の普及と旧郵政省電波管理局などとの折衝に当たった。この間、69歳の時（1997）、定年退職したハムの有志が集まって特定非営利活動法人「国際アマチュア無線ボランティアズ」（IARV, International Amateur Radio Volunteers; 2007年からは「認定NPO法人」）を立ち上げ、中近東・東南アジア・アフリカ諸国などの通信インフラの脆弱な地域の人たちのために緊急連絡用の無線連絡網の建設を支援した（①c）。しかし、携帯電話網が世界各地に張り巡らされるにつれて、林さんたちのIARVは役目を終え、本年（2019）5月に解散した。90歳の林さんはIARV解散時まで理事長を務めたが、支援活動中には次のような思わぬ出会いにも恵まれた。

要人とのつながり

有名な政治家にもアマチュア無線の愛好家がいる。なかでもアラファトさん（パレスチナ解放機構 PLO 議長, 1994年ノーベル平和賞）と小淵恵三衆議院議員（第84代内閣総理大臣, 1998～2000; 「国会アマチュア無線クラブ」会長）が印象に残っているようだ。アラファトさんとは誕生年月が同じ（1929年8月）ということもあって意気投合し、パレスチナのガザに行くたびに会っていた（図①a）。

予想外のことが起きたのは1996年の第1回パレスチナ評議会選挙のときだ。林さんたちのボランティア団体は選挙を円滑に行うために各投票所と選挙委員会本部を結ぶ無線局の設置に協力していた。そこに普段から空で話し合っているハム仲間の小淵さん（コールサイン JI1KIT, ①b）が現れたのだ。小淵さん（当時外相）から「オマエら、こんなところで何してるんだ?」「え?先生こそ!」となったわけだが、小淵さんは選挙監視団の団長としてパレスチナに来ていたのだ。ハム仲間として忘れられない出会いだった。他にも世界のリーダーであるハム仲間がいる：ヨルダンのフセイン国王（JY1）、タイのフミポ



① a, ヤサー・アラファト PLO 議長を囲んで林 夫妻、パレスチナ自治区にて〔左から田沼 健（JA8CDG）、林 節子（JA1UPA）、アラファト議長、林義雄（JA1UT）〕。b, 第1回パレスチナ評議員選挙中、パレスチナ自治区で小淵恵三衆議院議員（当時外相、JI1KIT, 国会アマチュア無線クラブ会長）とばったり出会った林さんたち〔出典：モバイルハム 24 巻, pp.100-102, 1996年3月号, 通巻 295号〕。c, カンボジア西部シアンクビルで、救急車に無線機を装着指導する林さん他 IARV の日本人ハムたち（2002）。



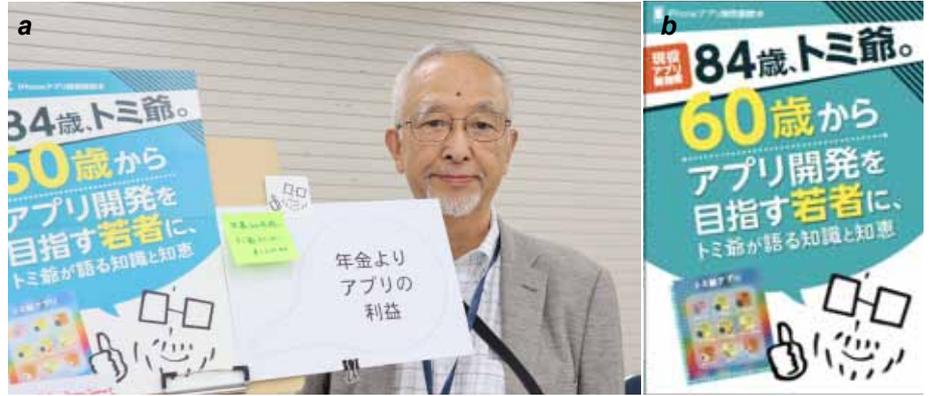
⑮ 無線通信の有用性をアピールするためのイラストの例。

ン国王 (HS1A) などだ。

言葉が通じないアフリカの部族などを訪ね、無線の有用性を訴えるときに利用したというイラスト (図 ⑮) も見せてもらったが、一目瞭然だ！ 社会の役に立つと思えば、イラスト片手に世界の隅々まで出かけていく；これぞ「蔵前魂」だろうか。IARV 解散後は任意団体として活動を続け、当面は無線網建設で訪れたサハラ砂漠に「ソーパネルとリチウムイオン電池を組み合わせた自然エネルギー発電所を作り、地球温暖化防止策の実現」に挑戦するそうだ。

江口宏明：富士通スペイン支社長、つくば科学万博富士通パビリオン館長、子ども科学教室

江口さんは本学の電気工学科を1957年に卒業後、富士通に勤めた。語学が堪能だったこともあって、外国勤



⑰ a, 展示ブース前の鈴木さん。鈴木さんのブースに張り出されていたポスター「年金よりアプリの利益」が印象的だった。来場者は1万人超。〔写真提供：Software Design 2019年12月号 News & Products〕。

b, 鈴木さんの最近の著書。池袋サンシャインシティ 展示ホールで本年 (2019) 9月22日に開かれた「技術書典7」に出品。タイトル：『60歳からアプリ開発を目指す若者に、トミ爺が語る知識と知恵』(B5版100頁)。

務が多かったが、スペイン語圏である南米に関してはほとんどの国を経験した。「富士通スペイン」の支社長を最後に定年退職したが、この間に「つくば科学万博」(1985)で“富士通パビリオン”の館長を務め、朝のラジオ体操などを通して若いスタッフらと意思の疎通を図ると共に、国内外の貴賓をもてなすなどの大役もこなした。

定年退職後は、市民活動団体「ひととゆめのネットワーク」代表 (2000～2017) として、児童館・公民館などで子ども科学教室を開催し、“科学大好き青少年”の育成に尽力してきている (図 ⑰)。子どもたちに科学の

不思議な世界を実験を通して体験し、感動を味わってもらうことが江口さんを始めとする企業を定年退職した人たちの喜びとなっているようだ。本学の学生の中にも江口さんたちに世話になった人がいるかもしれない。

同様の活動を行っている組織が本学の同窓会にもある。こちらの方は「蔵前理科教室ふしぎ不思議」(略称：くらりか、2005～)として子供たちの人気を集めているが、江口さんは、その立上げに際しノーハウを提供することにより大きな貢献をした。“くらりか”は、2014年文部科学大臣表彰 科学技術賞、2017年蔵前特別賞、2018年日本化学連合 化学コミュニケーション賞などを授与されている。

鈴木富司：三菱商事、自動車輸出物語、世界最高齢の現役 iOS アプリクリエイター、<http://www.tomiji.net/>

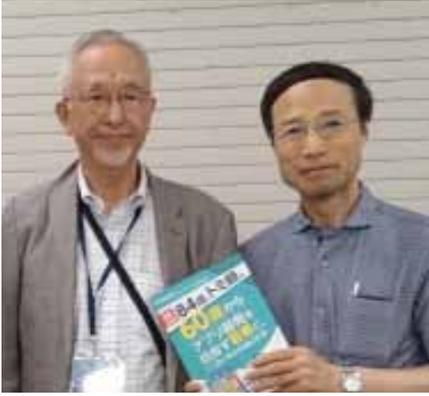
機械工学科卒の鈴木さんは、1960年に三菱商事に入社し、まさしく ASCOT 精神の具現化、即ち「技術協力によるアジア諸国の繁栄に向けて邁進した」と形容したくなるようなキャリアを積んだ。最初に配属された部署では、タイ向けの“いすゞトラック”の輸出を大幅に伸ばした。

1968年からは、インドネシア市場の開発に着手し、1981年までの13年間、インドネシアに於ける市場調査・



⑱ a, つくば万博の富士通パビリオンの入り口を背にした記念写真 (江口さんは左から5番目；壁には滝のように水が流れている)。富士通パビリオンのテーマは「人間・ゆめ・技術」で、副題の“未来と接する2400秒”が受けたのか、5時間待ちの長蛇の列だった。江口さんたちは努力が報われ嬉しかったに違いない。

b, 子供向け実験教室のテーマリストを手にする江口さん。〔出典：タウンニュース青葉区版、2014年11月20日号〕



⑬ 鈴木さんと取材者の広瀬茂久 (右)。2019.9.22

工場建設・販売網設定・工場運営・広告に加え、車の開発まで手がけた。頻りにインドネシア全土に出張するとともに、最後の5年間は駐在した。この間、トヨタを抑えて三菱車がトップシェアを維持し続けたことを誇りにしている。

鈴木さんは長らく自動車の輸出及び自動車の海外事業に従事した。定年後は、その経験をメールマガジン\$\$\$「自動車輸出物語〜〜みんな燃えた昔を語ろう」\$\$\$で発信し続け、現在85号になっている(Web pageでまとめて読むことができる：<http://www.tomiji.net/jidoosha/index.html>)。海外交渉相手は14ヶ国、22人種というから驚きだ。

生涯現役：鈴木さんは、モットーである「革新的な思想や技術を世に広める」ために生涯現役を貫いている。今も、iPhoneアプリ開発・アプリ開発書籍執筆(図⑭)・電子出版・HP制作など、超多忙だ。すでに7本のアプリをリリース済みで、現在8本目を開発中だそうだ。TVでも紹介されたが、iPhone用アプリ「音声入力アシスト」は使いやすさ・精度ともに秀逸だ。

最近では、世界最高齢の現役iOSアプリクリエイターとして注目され、日本経済新聞・産経新聞・毎日新聞・朝日新聞・NHKなどの取材攻勢を受けている。NHK「おはよう日本—関東甲信越」(2019.08.30)で見かけた方も多だろう。

(注1) 世界学生奉仕団(WUS, ウス)：世界各国の大学教職員と学生が健全な大学共同体づくりを目指して、相互に協力しようという団体で、第一次世界大戦後、ドイツとオーストリアの学生救済活動に端を発する。日本では第二次世界大戦後の1948年にスタートした。WUS(World University Service)の原義を尊重して、「世界大学奉仕団」とよばれることもある。「日本学生奉仕団」は、WUS加盟各国団体との協力のもとに学生生活の安定を図ることを目的として、上述のように1948年〔昭和23〕に設立され、1955年7月には学生サナトリウムを開設し、また、在日外国人学生に対する修学援助、WUS主催の国際セミナーへの教官・学生の派遣、アジア諸国大学への専門図書・医薬品の寄贈など学生への奉仕と国際理解の促進に寄与した。出典：(1)天野正子、「わたしの研究のあゆみ」(お茶の水女子大学大学院 最終講義), pp. 12-13, 2003, (2)学制百年史編集委員会, 「学制百年史」, “七 学生運動と学生生活”, 文部科学省。

The World University Service (WUS) was formerly known as the International Student Service (ISS). The origins of WUS can be traced back to the relief needs in Europe arising from WWI and efforts of universities throughout the world to assist their fellow-members in war-torn Europe. In the 1950s and today, WUS is a worldwide university organization of students and faculty dedicated to the ideal of a university community that transcends all barriers of race, nationality, and creed. Essentially it is a group dedicated to fostering mutual understanding at the university level through outreach and seminars. In 1955, WUS was active in 38 countries in Europe, Asia, Africa, the Middle East, and North America. See: UBCA, Frederick H. Soward Papers, Box 1, File 5, “The Responsibility of the University in a Changing World: Report of the Sixth International Seminar,” 10–11. Source: Christopher James Hyland, “English-Canadian Academics and External Affairs, 1919–1959”, PhD thesis, pp. 375–377, University of Calgary, 2016.

(注2) The responsibility of the university in a changing world : World University Service of Canada and Japan report on the international seminar and study tours held in Japan, July 1–August 20, 1955; foreword by Sidney E. Smith; evaluation by F. H. Soward. World University Service, 1955.

Soward, F.H., The responsibility of the

university in a changing world. Report on the Sixth international seminar, Summer 1955. Toronto, World university service of Canada, 1955. p.32–38, 48–52.

(注3) アジア学生技術会議：1956年〔昭和31〕6月に、林義雄(電気工学科)、江口宏明(電気工学科)、石原幸正(化学工学科)、南宮 寔(なんぐう まこと、東工大大学院 化学工学、韓国からの留学生)、影山邦夫(化学工学科)、鈴木富司(機械工学科)、杉山茂(化学工学科)、丸野富士也(機械工学科)らESS及び海外研究会の有志らが校友会の下に結成した組織(校友会執行委員長も加わった)。各国の技術協力によるアジアの発展を視野に、将来を担う日本の学生とアジアからの留学生が寝食を共にする約2週間の工場見学旅行やセミナーを約1年間にわたって企画・実施した。企画立案・資金集め・会議の実施・報告書の作成など総て学生自身の手で行うのが特徴。

第1回ASCOT-1957には本学から15名の学生が参加した(3名の留学生を含む)。

(注4) 日中文化交流協会：1956年3月23日、中島健蔵(仏文学者)・千田是也(演出家)・井上靖(作家)・團伊玖磨(作曲家)らが中心となり、日中両国間の友好と文化交流を促進するための民間団体として創立された。文字どおり、文化・スポーツなどの実務的交流活動を続けている。これに対し、1950年10月1日に設立された「日中友好協会」は日本共産党の影響下でどちらかという政治色の強い運動を展開していたが、1966年に中国で勃発した「文化大革命」の評価をめぐる内部対立で2派に分裂し今日に至っている：公益社団法人日本中国友好協会(主流派、丹羽宇一郎代表)& 日本中国友好協会(非主流派、大村新一郎代表)。

(注5) 中国宛の電報：日本語を中国語に翻訳した後に、漢字電報コード変換表に従って、一字ずつ4桁の数字に置き換える必要があったそうだ。「東工大」ならば、「2639 1562 1129」となる。

| | | | |
|------|-------|--------------|-----|
| 0735 | 偷 | 0262 8082 | * 透 |
| 0960 | * 东/東 | 2639 | 猱/猱 |
| 1167 | 冻/凍 | 0408 | 镗/鏜 |

(注6) 本学と清華大学の連携：2004年から大学院合同プログラムを運営、2006年に清華大学の構内に中国オフィスを設置、2019年に清華大学の邢新会(Xing XinHui, 次頁写真)教授に「東京工業大学フェロー」の称号を贈つ



た。邢さんは大学院を日本で終え、本学で助手（1992～1998）、横浜国立大学で講師及び助教授（1998～2001）を務めた後に清華大学の教授となった（2000～現在）。帰国後は本学との連携（特に東京工業大学・清華大学大学院共同プログラムの運営）に尽力しており、その功績により本学から上記の称号を授与された。

〔注7〕 出典：NPO 法人 東アジア環境・省エネ協会誌「ESPA」Vol. 1, 3-7, May 2010; ESPA = Energy Saving and Pollution Control Association of East Asia.

〔注8〕 引率教官のコメント

崎川範行①c：私は今回の第一回学生技術会議の見学旅行に引率者として参加できたことを非常な光栄と思っている。最初この計画を聞かされた時には、果たしてそのような大計画が簡単にできるであろうかと不安に感じられたが、計画に当たった学生諸君の異常ともいえる熱意と努力によって、ついにその計画が成立したと聞いたとき私は大変な感激を覚え、このアジア諸国、ひいては世界の親善と平和、そして新しい発展に重要な意義をもつこの旅行が無事に成果を上げるようにと心から祈ったのであった。そして見学旅行に出発してみると、留学生諸君の熱心さと紳士的な行動、そして諸会社の極めて親切な協力と好意によって、不便をしかも多忙をきわめた旅行も、

ほんの些か（いささか）の支障もなく多大の成果を収めることができたのであった。私はその成功を心から喜び、将来もこの技術会議が中断されることなく、ますます盛大に発展するであろうことを希望して止まないものである。不行き届きな引率者として参加諸氏に御詫びすると同時に、その成功に対して関係各位のご協力を心から感謝する次第である。

向 正夫②c：全く偶然、本旅行団引率教官崎川先生のご都合から、私ははからずも後半の旅程に引率教官のバトンを受け継いで、約一週間今まで全く知らなかったアジア各国の学生たちと各地を旅行し、多くの知己を得ることが出来た。はるばる日本に留学してきた彼らに少しでも多くのことを学び、吾国の実情を知って貰うことこそ、将来彼我友好の基因であることは言うまでもない。この意義深い今回の計画の主催者や後援者に対して、私は満腔の敬意と賛辞を送りたい。今回は一大学の学友会によって計画され、偶然にも諸方面から多大のご援助を戴いたおかげで、小規模ながら以前は殆んど顧みられなかった留学生へのよき課外活動の機会となったのであるが、**今後は是非このような計画が毎年多くの留学生を迎える衝にある外務省や文部省の当局者において積極的に推進され、より拡大された規模において実行されることを希ってやまない。**おのおの専門を異にする各留学生に対して、その専門的な指導はそれぞれの大学において充分になされているとしても、日常ただ宿舍と教室とを往復しているだけの実情では、到底日本の社会、経済、人情などの深い理解、そして個人的知己などは全く得られないであろう。そしてそのまま再び祖国に帰っていくとしたら、吾々としてもまことに不本意である。広島で土地

の学生奉仕団の男女学生と極めて真面目に、若人らしい澁淵とした雰囲気の中で討論がなされ、また平和記念館では目を掩（おお）わしめる数々の原爆資料を前にして真剣に平和を祈念し、さらに宮島の美しい風物を賞でつつ楽しい語らいの散策の機会を持ちえたことは、本旅程中最も若人だけに享受し得た貴重なアジア融合のひとつきであったと思う。今まで催された幾多の国際会議における贅を尽くした懇親会といえども、今回ほど各国人が相互理解を深め得た催しは未だかつて一度もなかったと私は信じる。

全旅程を通じ一滴の酒も口にせず、三等汽車に揺られ、宿舍も食事も大人の社会から見れば、いわば最低の待遇の内に、一言の不平等もなく、若さ故に笑いとほほえみに包まれて、片言の日本語を通じて互いに信頼と理解を勝ち得、親近の度を日ごとに増していった。そして専門的にも各々の立場から貴重な収穫を積み重ねていった。傍らから彼らを眺めつつあった私は、心から彼らの前途に祝福を送ったのである。一行の中には帰京直後に帰国する人もいた。恐らく2年もたてば、一行の全部は一人一人故国に、それぞれの重要な役務に立つことであろう。この人達に日本に留学している期間中、少しでも楽しく有意義に日々を送らせてあげることが、私達のつとめである。旅行を了え、その報告会において彼らは、口を揃えて今回の旅行が彼らの生涯の思い出となったことを述べた。これだけでも今回は大成功であったと私は思う。

2020年1月

執筆：広瀬茂久

発行：博物館 資史料館部門

博物館 部門

東京工業大学 博物館

資史料館 部門

152-8550 東京都目黒区大岡山 2-12-1-E3-12 03-5734-3340 centsairy@jim.titech.ac.jp
http://www.cent.titech.ac.jp/

佐藤 勲（館長，総括理事・副学長）
山崎鯛介（教授，副館長，博物館部門長）
広瀬茂久（特命教授，資史料館部門長）
奥山信一（教授，兼任）
金子寛彦（教授，兼任）
野原佳代子（教授，兼任）
大竹尚登（教授，兼任）

亀井宏行（特任教授）
宮前知佐子（研究員）
酒井正好（事務員）
佐々木裕子（事務支援員，学芸員）
桐明紀子（事務支援員，学芸員）
渡辺菊乃（事務支援員，資史料館）
鎌田祐輔（事務支援員，資史料館）

本間英子（事務支援員，資史料館）
桑原千佳（事務支援員，資史料館）
渋谷真理子（事務支援員，資史料館）
広報・社会連携課（博物館担当）
堤田直子（課長）
太田邦之（社会連携グループ長）
岡部史郎（事務員）